



 Data	2024-47
監督・脚本：婁燁（ロウ・イエ）	
出演：郝蕾（ハオ・レイ）／郭曉冬（グオ・シャオドン）／胡伶（フー・リン）／張献民（チャン・シャンミン）／崔林（ツイ・リン）／曾美慧孜（ツァン・メイホイツイ）／白雪雲（バイ・シューヨン）／段奕宏（ダン・イーホン）／王晓坤（ワン・シャオシェン）	

みどころ

私は張芸謀（チャン・イーモウ）監督や陳凱歌（チェン・カイコー）監督以上に、婁燁（ロウ・イエ）監督が大好き！『ふたりの人魚』（00年）、『パール・バタフライ』（03年）に続く第4作目の本作で、彼は「中国国内上映禁止及び5年間の表現活動禁止処分」を受けたが、何の何の！その後の精力的な創作活動と傑作の蓄積によって、今や賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督と並ぶ、第6世代監督の巨匠に！

本作の原題『頤和園』とは一体ナニ？まずはそれを学習した上で、1989年6月4日に起きた「天安門事件」の背景とその実態をしっかりと勉強したい。もっとも、本作は政治的な映画ではなく、あくまで青春群像劇だ。あの時代の北清大学のキャンパス内での青春模様は如何に？ヒロインの人生観、男性観、セックス観は如何に？1960年代後半に、彼女と同じような問題意識で青春時代を過ごし、「オレ流」の人生観、女性観、セックス観を養ってきた私には、本作は宝石のような輝きがある。

そんなロウ・イエ監督の傑作が、フィルムの質感を残しながらデジタル化したことによって、2008年に続いて日本で再上映されたことに感謝！感謝！そんな本作については、75歳の再鑑賞時の評論に2008年の鑑賞時の評論（『シネマ21』259頁）を添付しておきたい。

■なぜ2006年の本作が2024年の今、劇場公開に？■

私は中国第5世代を代表する張芸謀（チャン・イーモウ）監督も陳凱歌（チェン・カイコー）監督も大好き。しかし、それ以上に大好きな監督が賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督と共に中国第6世代を代表する婁燁（ロウ・イエ）監督だ。

近時公開された『シャドウブレイ』(18年)、『シネマ 52』231頁)も面白かったし、『サタデー・フィクション』(19年)、『シネマ 53』274頁)も、メチャ面白かった。

劇場で『作家主義 婁燁』を販売しているのを知った私は、『シャドウブレイ』を鑑賞した後すぐに、定価 2,200 円プラス消費税の同書を購入。そのコンテンツは次の通りだ。



ロウ・イエ監督は、本作で「中国国内上映禁止及び 5 年間の表現活動禁止処分」を下されたが、彼はなぜその後も精力的に作品を撮り続けた上、その作品が日本でもすべて公開され続けているの？しかも、彼の最大の問題提起作である 2006 年公開の本作が、なぜ今、日本で再上映されることに？

■フィルムからデジタルへ！その技術は？こだわりは？■

ロウ・イエ監督の映画は、今ドキの明るくて分かりやすい映画とは正反対、画面は暗く、手持ちカメラ(?)で撮る映像は、揺れて分かりにくい。また、彼の作品は雨のシーンが多いのが特徴だから、余計暗くて分かりにくい。そんな彼の映像へのこだわりは、当然フィルムにあるが、その撮影方法は如何に？

もちろん、私にはその専門的なことは分からないが、彼が今ドキのデジタル撮影の手法をとらずフィルム撮影にこだわっていることは間違いない。もちろん、本作もフィルムボーン(フィルム生まれ＝フィルムで撮影されたもの)だ。しかし、フィルム撮影の映画はその品質を保持するのが大変だから、近時はフィルム撮影した昔の名作を 4K レストア等の技術で加工して、再上映しているケースが多い。私はてっきり本作もそうかと思ったが、本作は 4K レストア版ではない。その点については、本作のパンフレットに収められている、芦澤明子氏の「フィルムに込めた思いを未来に残すため」で詳しく解説されているので、これは必読だ。

それによると、本作は「フィルムボーン（フィルム生まれ＝フィルムで撮影されたもの）の作品であり、DCP 化によって良さが失われてしまうのではないかと危惧しましたが、今流行りの 4K レストアなど行わず、現存ポジフィルムをそのままフィルムスキャンして DCP 化（多少、カラーグレーディングは行ったようです）したためか、フィルムで撮影したデジタル化した作品のような仕上がりになっているということです。」だそうだから、今回の再上映には、かなりの手間ヒマがかかけられていることがよくわかる。なるほど、なるほど、そして感謝、感謝！

■□■本作の時代背景は？本作以後の婁燁監督の成長は？■□■

本作の邦題「天安門、恋人たち」を見れば、誰でも本作が 1989 年 6 月 4 日に起きた「天安門事件」をテーマにした映画だと思ってしまう。たしかに、本作の時代は 1987 年から始まるし、1989 年に起きた天安門事件が重要な題材になっているが、実は本作は、それ以上に青春群像劇の色彩が強い。また、冒頭に読み上げられる「余紅（ユー・ホン）の日記」の通り、1987 年に中国東北地方の図們から北清大学に入学して北京にやってきた、かなりエキセントリックな少女ユー・ホン（郝蕾／ハオ・レイ）が冒頭に読みあげる日記、「ある夏の晩、それは風の如く、突然やってきた。どうにも防ぎようがなく心を乱され、影のように、つきまとって離れない。それがなにかは分からないが、あえて呼ぶなら愛情だろう。」のとおり、彼女の人生観と男性観、そしてセックス観を強烈に見せつけた映画だ。

本作の原題は『頤和園』だが、あなたは誰？それが何とかのために作った頤和園を知っている？また、なぜそれが『サマーパレス』と呼ばれているのか知っている？本作を正しく理解するためには、そんな知識も必要だ。

また本作のパンフレットには、本作の時代背景として、次の年表があるので、その理解も不可欠だ。

1985 年	ソ連ゴルバチョフ書記長就任
1989 年	天安門事件
1889 年	ベルリンの壁崩壊
1990 年	ドイツ東西統一
1991 年	ソ連崩壊
1997 年	鄧小平死去
1997 年	香港返還
2001 年	中国、世界貿易機構（WHO）に加盟

他方、『周末情人（原題）』（93 年）、『ふたりの人魚』（00 年）（『シネマ 5』253 頁）、『パープル・バタフライ』（03 年）（『シネマ 17』220 頁）に続いて、本作が第 4 作目となったロウ・イエ監督のその後の監督作品は、次の通りだ。

『天安門、恋人たち』（本作）（06 年）（『シネマ 21』259 頁）
『スプリング・フィーバー』（09 年）（『シネマ 26』73 頁）
『パリ、ただよう花』（11 年）（『シネマ 32』136 頁）

『二重生活』(12年) (『シネマ 35』 152 頁)
 『ブラインド・マッサージ』(14年) (『シネマ 39』 46 頁)
 『シャドウブレイ』(18年) (『シネマ 52』 231 頁)
 『サタデー・フィクション』(19年) (『シネマ 53』 274 頁)
 『AN UNFINISHED FILM (未完成)』

これを見れば、彼が第 6 世代監督の旗手たるジャ・ジャンクー監督と同じように、いかに順調に“巨匠”への道を歩んできたのかがよくわかる。そんな彼の本作は、何度見ても最高！

■□■2008 年の鑑賞時の衝撃はその時の評論記載の通り！■□■

私が中国映画にハマったのは、2004 年 6 月 19 日～7 月 30 日までシネ・ヌーヴォで開催された「中国映画の全貌 2004」で、2 万円のフリーパス券を購入して約 30 本の中国映画を一気に見た時からだ。その時点では、チャン・イーモウ監督、チェン・カイコー監督を中心とする第 5 世代監督の名作が衝撃的だったから、ロウ・イエ監督の『ふたりの人魚』は、美人女優、周迅(ジョウ・シュン)の顔と名前を覚えてくらいだった。しかし、その 3 年後の 2007 年に『パープル・バタフライ』を見た時の衝撃は凄まじかった。「上海を舞台としたスパイ映画」というテーマにビックリなら、章子怡(チャン・ツイイー)と仲村トオルの共演にもビックリ、そして、暗い質感と揺れる映像、クローズアップの多様と雨のシーンの多さにもビックリ！アツと驚くラストシーンを含めて、ロウ・イエ監督の問題提起に日本人として大きな衝撃を受けたものだ。

したがって、その翌年に公開された『天安門、恋人たち』と題された本作は、私には必見だった。2008 年の本作鑑賞時、私ははっきり本作は「天安門事件」をテーマとした政治的な映画だと思っていたが、いやいや、さに非ず。日本で言えば、さしずめ『愛のコリダ』(76 年)のような濃厚なセックス描写にビックリ！中国映画がここまで自由奔放なセックスの描き方をしたことに、私は大きな衝撃を受けたものだ。図們出身のヒロイン、ユー・ホンの北清大学でのキャンパス生活は 1988 年からだが、松山出身の私の大阪大学でのキャンパス生活は 1967 年からだ。私の大学入学直後には、柴田翔の小説『されどわれらが日々』(64 年)が学生たちの必読書になっていた。それはそれで面白かったが、私はその後出版された彼の中編 2 編を収めた『贈る言葉』(66 年)の中の『十年の後』がめちゃ面白かった。同作はキャンパス生活から 10 年を経た後の同級生たちの青春群像劇(限りない挫折感の吐露)だが、まさに自分の姿と対比しながら一気に読み上げたものだ。

しかして、本作前半はロウ・イエ監督流の北清大学で過ごす主人公たちの青春群像劇だが、後半はまさに彼らの「10 年の後」を描くものになる。その多くは失望と挫折だが、それは一体なぜ？彼らはなぜ希望と未来への展望を描けなかったの？そんな思いをかみしめながら、あの時の感動をもう一度体験できたことに感謝！対比の意味で、本作の評論には 2008 年鑑賞時の評論も添付しておきたい。

2024 (令和 6) 年 6 月 25 日記